

序

小田内隆先生は、2019年3月をもってご定年を迎えられます。立命館大学人文学会は、先生の長年にわたるご功績を称え、深い感謝の意を表すため、ここに退職記念の論集を編んで献呈させていただくこととしました。

小田内先生は長野県のご出身で、1976年3月に早稲田大学教育学部をご卒業後、早稲田大学大学院文学研究科史学専攻に進学され、1985年3月に同研究科史学専攻博士課程を単位取得満期退学されました。1986年4月より2年間、早稲田大学文学部助手を務められました。そして1993年4月に文学部の西洋史学専攻の助教授として立命館大学に着任され、1997年4月に教授に昇任され、これまで26年の長きにわたり、教育・研究に尽力されました。その間、2001年度には初代文学部入試主事を、2016・17年度には大学協議会委員を務められました。

先生の専門分野は、西洋中世史で、とくにキリスト教会における異端の問題を追求して来られました。先生のご関心は、民衆による教会の改革運動、改革をめぐる析出・排除される異端の存在、異端を創出し、異端との境界を設定し続ける「正統」の再検討と多岐にわたりますが、先生のまなざしは常に少数者（マイノリティ）に向けられてきました。異端とは、教会権力をはじめとする他者によって規定される存在であると同時に、歴史的主体として自ら異端として「生きる」ことを選択した人たちであるという先生のアプローチは、西洋中世史の分野を超えて大きな意義を持ちます。とくに21世紀が、世界規模で文化や宗教による対立の噴出を見ることになってしまったなかで、単純な善悪二元論に陥らず、その一方で無責任な寛容さに墮することなく、覚悟を持って「違うこと」「相容れないこと」に向き合うことが我々に求められています。小田内先生の真摯な研究から伺える、西洋中世人の命をかけた「対話」から学ぶことは多いと思います。

西洋史学専攻では、小田内先生の中世史ゼミは常に人気のゼミでした。会議等では決して饒舌とは言えない先生ですが、先生の深い学識と、学生を中世史研究の深みに誘う先生のコメントや日常的なご指導が、多くの学生を引きつけてきました。大学院の西洋史学専修でも、これまで巣立った修了生の過半数は小田内先生の薫陶を受けた弟子たちでした。私も研究室が隣であったことから、専攻業務の打ち合わせなどで先生の研究室にお邪魔するたびに、西洋史学の方法論や隣接社会科学の理論について教えていただきました。議論の本質をえぐり出す先生の「講義」を聞くのが楽しく、つい長居することも多かったことをなつかしく思い出します。

文学部教授会は、永年のご貢献に謝意を表すため、来る4月1日付で先生に名誉教授の称号をお送りするよう全学の手続きを進めました。今後とも、わたくしども後進を見守り、文学部および文学研究科の教学をより良くするために、先生のご助言を賜うことができますれば幸甚に存じます。

2019年3月

立命館大学人文学会会長

文学部長 米 山 裕

